

学苑・日本文学紀要 第九一五号 三七〇四七（二〇一七・一）

# 『更級日記』の「おきながといふ人」をめぐって

——孝標女の父祖意識——

元 吉 進

## 一

『更級日記』の作者は、日記において自らが菅原孝標の娘であるとの表出はおろか、菅原氏の家系や、名立たる先祖である菅原道真について窺わせる記述は一切行っていない。作者には菅公の末裔であるという意識が全くないかの如くである。女性である作者の立場からすれば、学問の家柄を継承し守るのは兄弟定義の務めであり、家門に対する意識は芽生えにくかったともいえるだろう。『扶桑略記』治安三年（一〇三三）十月十九日条に記す有名な逸話、高野山参詣途次の藤原道長が吉野の龍門寺方丈に書かれていた都良香・菅原道真の真蹟を見物した際、その傍らに「仮手之文」を見出し、それが「菅家末葉」である「前総州刺史孝標」の思慮を欠いた行為と分かって人々の嘲笑の対象になった、というのは、孝標の人物を語る際には必ず引き合いに出される資料だが、「正常な平衡感覚からは逸脱したもの」<sup>（注一）</sup>ではあるものの、そうした「売名行為」<sup>（注二）</sup>によって官途を拓こうという気持ちの表れと考えれば、名門菅原家を守ろうとする孝標の一途な思いすら汲み取ることができそうである。官僚としては思うように立ち回れなかった孝標の、栄えある先祖に対する誇らかな思いがなせる業というこ

とであろう。『更級日記』には、常陸介退任後帰京して隠居した父が「われをおとなにし据ゑて」<sup>（注三）</sup>、すなわち娘である作者を一家の主婦に据えて家を仕切らせた、と記されるが、それでも作者には菅原氏の名譽ある家を守る、というような意識はなかったということであろうか。一方で、作者が耽読した『源氏物語』の作者紫式部は、宮仕えから里帰りした自邸を「見どころもなき古里」、「あやしう黒みすすけたる曹子」<sup>（注四）</sup>（『紫式部日記』）、「こよなう塵積り、荒れまさりにける」（『紫式部集』）と記す。けれどもそこは、紛うことなく堤中納言兼輔以来伝領されてきた堤邸であり、紫式部に古き名家の娘という意識を窺うことができる。<sup>（注四）</sup>『枕草子』「五月の御精進のほど」の段では、中宮定子の「元輔が後といはるる君しもや今宵の歌にはづれてはをる」との問い掛けに、清少納言は「その人の後といはれぬ身なりせばこよひの歌をまづぞよまし」と返歌している。『古今和歌集』歌人の清原深養父、梨壺の五人の一人で「歌詠み元輔」と称揚された清原元輔と連なる歌の家の伝統を多分に意識した清少納言の心の在り様が窺える章段である。

言うまでもなく菅原道真は学問の神様であり、菅原家は学問の家柄であった。だが、『紫式部日記』に記す有名な逸話、父為時が息子惟規に学問

を教える傍らで、不思議な程の理解力を見せる幼い娘・式部の存在が、父為時をして「口惜しう、男子にて持たらぬこそ幸ひなかりけれ」と嘆かしため続けた、という逸話を待つまでもなく、女子に学問は不要という時代であったのである。孝標女にとってもそれは同断であり、学問のことは思慮の外、先祖道真は話題にし難い、扱いの難しい存在ということだったのかもしれない。それでは、『更級日記』には道真や菅原家に対する意識が完全に抹殺されたかと言えば、そうとも言い切れないのではないか。菅原氏の存在については別稿で言及したことがあるので、今回は日記に記された「おきながといふ人」の存在に注目して、菅原道真という高名な父祖に対する孝標女の認識の可能性を探ってみたい。

## 二

『更級日記』の上洛の記に、

雪ふりあれまどふに、ものの興もなく、不破の関、あつみの山など越えて、  
近江の国おきながといふ人の家に宿りて、四五日あり。

とあった。『更級日記』において、人名が明記されるのはこの「おきながといふ人」、すなわち息長氏以外に三例が挙げられる。

・武蔵国竹芝伝承の中で語られた、武蔵の男と宮の間に生まれた子が「武蔵といふ姓」を得る

・「あすだ川」の渡りで「在五中将」在原業平の和歌について記す

・大嘗会の御禊の喧噪の中、初瀬詣でに向かう作者の意中を代弁してくれた「良頼の兵衛督」家の人

である。これ以外の登場人物は、衛門の命婦、侍従の大納言の御むすめ、

など、官職名や女房名で書かれている。竹芝伝承の「武蔵といふ姓」は、『将門記』にもその名が見えるが伝承の語りの中の人物であるし、「在五中将」も『伊勢物語』の主人公として伝説化された人物であって、作者の実体験の枠外に属する。それに対して、作者が実際に身近に接して、しかも実名で書かれた人物は兵衛督藤原良頼と息長氏である。もっとも良頼の場合は、「いみじくおぼし立ちて、仏の御徳かならず見たまふべき人にこそあめれ。よしなしかし。物見で、かうこそ思ひ立つべかりけれ」と言ってくれたのは、良頼本人ではなくその家の人と思われるので、実体験として作者と直接の交流を持ったのは、息長氏のみということになる。そこで、まず、息長氏という氏族が如何なる存在であったのかを、確認してみたい。息長氏に関する歴史資料は多くない。近江国坂田郡を本拠とする地方豪族であり、『日本書紀』天武天皇十三年条に記された八色の姓制定に際し、最上位の真人を与えられていることから、朝廷内でも大きな力を有していたことが推定される。『古事記』開化天皇条には、御子の日子坐王の妻の一人として息長水依比売の名が見え、その四世の孫息長宿禰王の娘が仲哀天皇の皇后、息長帯比売命（神功皇后）であると書かれる。応神天皇はこの息長帯比売命を母とする。以下、景行記には、倭建命の子孫に息長真若中比売の名があり、応神記には天皇がその比売を娶ったことが記される。記紀に述べられた神功皇后は、夫仲哀天皇に従って熊襲征討に向かう途上、天照大神、住吉三神の託宣を得て、急死した夫に代わって身重にもかかわらず新羅を征討し、帰国後に筑紫の宇美で皇子（後の応神天皇）を出産、応神天皇即位までの六十九年間を摂政として政務に携わった、伝説的な人物である。神功皇后は息長氏を出自とするが、これには「神功伝説の形成に、息長氏が関与したことについては、神功皇后がオキナガ、タラシヒメと

称することから、従来より注意されていた、「(注六)記紀にみえる神功伝説と系譜は、天武朝以降、息長氏の関与によって成立した」と指摘されている。神功皇后にまつわる伝承は、出自である息長氏と深い関わりがあったのである。

神功皇后は筑紫の海辺の宇美で応神天皇を出産しているが、記紀神話の中では、海神の娘豊玉姫が海辺で鵜葺草葺不合尊を出産することと共通の要素が指摘できる。神功皇后の新羅征討に海神である住吉三神が関わっていることもあって、息長氏は海人系の氏族と考えられている。『万葉集』巻二十、4458番歌「には鳥の息長川は絶えぬとも君に語らむ言尽きめやも」に歌われた息長川は近江国坂田郡の息長氏の根拠地を流れて琵琶湖に注ぐ。「には鳥」は水鳥カイツブリの古名で潜水を得意とし長時間水に潜ること、つまり息が長いことから、「いき」の古形「おき」を含む息長川に掛かる枕詞であった。このことも、息長氏が海人系の氏族であることを示しているだろう。さらにまた、次のような指摘もある。

近江坂田の息長氏の伝承には、海人的性格がまつわっていた。近江坂田は北陸と大和とを結ぶ要所に位置した。『古事記』の応神天皇の条には

「この蟹や いづくの蟹 百伝ふ 角鹿の蟹」

の歌がある。この歌は敦賀地方の海人集団が御贄を大和へ貢上する寿歌が本来の姿であったと思われるが、その歌には敦賀と大和とをむすぶ「楽浪道」の道行きが詠みこまれていた。(注七)

近江国坂田郡の息長は、現在の滋賀県米原市の天野川下流域になるが、そこから琵琶湖を北上し、塩津から愛発関を越えれば越前国「角鹿」（敦賀）は直ぐである。『古事記』では皇太子時代の応神天皇（品陀和氣命・ホムダ

ワケノミコト）が越前国角鹿の氣比大神に詣でて、大神（伊奢沙別命・イザサワケノミコト）と名前を替えた、と記している。応神天皇は神功皇后、すなわち息長帯比売命を母としていた。後述するように、氣比神宮の祭神、伊奢沙別命は海人族によって信仰された神であり、神宮には他に神功皇后と応神天皇も祀られている。息長氏と敦賀の地とは密接な関係があった。息長氏は近江国坂田郡を拠点として息長川、琵琶湖水系を支配し、越前国敦賀とも交流のあった海人系の氏族であったのである。

氣比神宮は古くは筭飯宮、筭飯大神宮と呼ばれ、『延喜式』神名帳の越前国敦賀郡に「氣比神社七座」と記載されている。祭神は先述の伊奢沙別命、息長帯比売命すなわち神功皇后、品陀和氣命すなわち応神天皇の他、仲哀天皇、日本武尊、玉妃命、武内宿禰命の七柱である。このうち、伊奢沙別命は氣比大神、御食津大神とも称され、古くからこの地で信仰されていた神と考えられている。敦賀は古くは角鹿と表記され、訓じられていた。(注八)その地名に関する説話が『日本書紀』に見える。垂仁天皇二年の条では、「御間城天皇の世」に「意富加羅國」の王子「都怒我阿羅斯等」が「筭飯浦」に到着したが、その「額に角有る人」であったのでここを角鹿と呼ぶようになった、とされる。敦賀は日本海側の中心に位置し、天然の良港に恵まれ、対外的な門戸として重視された。また、愛発越えで琵琶湖が近く、その水系を利用して大和国とも結ばれ、また越の道の口として国内的にも交通、軍事の要衝にあった。

『古事記』の仲哀天皇条には、神功皇后の新羅征討、忍熊王らの反乱鎮圧に続いて、氣比大神に関する次の説話を伝える。

故、建内宿禰命、其の太子を率て、襖せむと為て、淡海と若狭との国を

経歴し時に、高志前の角鹿に仮宮を造りて、坐せき。爾くして、其地に坐す伊奢沙和氣大神之命、夜の夢に見えて云ひしく、「吾が名を以て、御子の御名に易へむと欲ふ」といひき。爾くして、言きて白ししく、「恐し。命の隨に易へ奉らむ」とまをしき。亦、其の神の詔ひしく、「明日の旦に、浜に幸すべし。名を易ふる幣を献らむ」とのりたまひき。故、其の旦に浜に幸行し時に、鼻を毀てる入鹿魚、既に一浦に依りき。是に、御子、神に白さしめて云ひしく、「我に御食の魚を給へり」といひき。故、亦、其の御名を称へて御食津大神と号けき。故、今に氣比大神と謂ふ。亦、其の入鹿魚の鼻の血、晝し。故、其の浦を号けて、血浦と謂ひき。今は都奴賀と謂ふ。(注九)

ここに、「入鹿魚」の鼻の血に因む「血浦」と、それが転訛して「都奴賀」という地名になったという、もう一つの敦賀の地名説話が語られている。

加えて太子品陀和氣命、すなわち後の応神天皇が武内宿禰を伴って角鹿に赴き、伊奢沙別大神と名を替えたことが述べられる。「名の交換は服従帰属儀礼の一つで、当社と朝廷との深い結びつきを物語るもの」と考えられる。(注十) 太子が名を替えたことに對して大神が魚を献上したことが御食津大神という神名の由来となったのであるが、この名と氣比大神の名の關係については、「ケヒはケ(食物)のヒ(靈力)の意で、「御食津大神」と同義か」とされる。さらに、『日本書紀』神功皇后摂政十三年の条にも「武内宿禰に命せて、太子に従ひて角鹿の筭飯大神を拝みまつらしむ。」とあり、太子品陀和氣命と武内宿禰が氣比大神参拝に遣わされたことを記している。この参拝の目的は、仲哀記によれば忍熊王を淡海の海に滅ぼしたことの禊ぎとされているが、太子の父仲哀天皇はその二年二月に「角鹿に幸し、即ち行宮を興てて居します。是を筭飯宮と謂ふ。」(仲哀紀)とあって、仲哀

天皇が敦賀氣比の地と縁が深かったこと、この地が対新羅關係と国内交通の要衝であったこと、すなわち、朝廷にとって敦賀が重要な地であったことが背景にあったものと思われる。こうして氣比大神は、「もともと海人族によって信仰された土俗的な神、すなわち食物の神靈の大神であったと想像されるが、この地の重要性から、やがて朝廷と接触をもち、国家的守護神として崇敬を受けることとなった」のである。(注十二) 言うまでもなく仲哀天皇の後は神功皇后、すなわち息長氏の娘である息長帯比売命である。氣比大神の信仰には、その背後に息長氏の存在が影を落としていることが確認できるだろう。

### 三

筭飯大神(氣比神宮)は、息長氏にとっても重要な存在であったことを確認した。ここで、方向を変えて菅原道真と敦賀氣比の關係について、検討してみたい。道真は中央政界での活躍以外に、地方体験として讃岐に赴任したことがあった。仁和二年(八八六)四十二歳の正月の除目で讃岐守に任命され、寛平二年(八九〇)春、任果てるまで現地にあった。この間、仁和三年の秋、暇を願ひ出て一時帰京したことはあったが、それ以外は精力的に国内を巡検し、地方政治に心を砕いたようである。また、道真の人生最後の旅は、昌泰四年(九〇二)の春、五十七歳での大宰権帥左遷の旅であったのは言うまでもない。これ以外で、道真の都を離れた地方への旅を以下に記してみると、(注十三)

- ① 越前國氣比神宮参拝(貞觀十八年(八七六)秋、三十二歳)
- ② 河西の山莊に遊覧(仁和元年(八八五)九月二十六日、四十一歳)



- ③ 吉野龍門寺に遊ぶ（寛平五年（八九三）冬、四十九歳）
- ④ 北野遊覧（寛平八年（八九六）閏一月六日、五十二歳）
- ⑤ 吉野宮滝遊覧（昌泰元年（八九八）十月二十日から十一月一日、五十四歳）
- ⑥ 大和国高市郡の山荘行き

という具合である。②は、阿波守平某に従って河西の山荘に趣いたのだが、そこは鴨川下流の鳥羽の西、乙訓郡の地とされる。③の龍門寺は大和国吉野郡にあり、久米の仙人が籠もった伝説で知られる山寺である。この旅で道真が作ったのが『菅家文章』に載る374番の「遊龍門寺」であった。この際、道真は方丈の扉に自ら詩を認めたようで、後年治安三年（一一〇三）十月十九日に藤原道長が高野山参詣の途上に当寺に立ち寄った際の出来事は先述の通りである。④は宇多天皇の雲林院行幸に扈從して洛外の北野を遊覧したものである。⑤は宇多上皇が河内国片野の鷹狩りから吉野の宮滝へと行幸し、さらに竜田を越えて住吉に詣でて帰京する旅で、これに従った道真はその見聞を『宮滝御幸記』に残している。ついにながら、『古今和歌集』羈旅卷や百人一首で知られる「このたびは幣もとりあへず手向山紅葉の錦神のまにまに」の歌は、この旅に際して道真が詠んだものであった。なお、⑥は、⑤の記録、『宮滝御幸記略』（『菅家文章』680）の十月二十三日条、「日暮留宿於大和国高市郡右大將山荘也」という記事から、当時右大將を兼官していた道真が高市郡に山荘を所有しており、一行は十月二十三日の夜をそこで過ごしたことが分かる。この山荘は他に記事が見られないので、道真がどの程度の頻度でそれを利用していたのか、つまり高市郡近辺への旅の状況は不明である。ちなみに、高市郡は飛鳥を中心とした奈良盆地南西部を占める地域で、その南に宮滝や吉野のある吉野郡が

接している。最後に①について、確認しておく。『菅家文章』の75番「秋日山行二十韻。于<sub>レ</sub>時祈<sub>レ</sub>神向<sub>レ</sub>越州社。」、および76番の「海上月夜。于<sub>レ</sub>時祈<sub>レ</sub>神到<sub>レ</sub>越州。」と題する二編は、貞観十八年の秋、越前国敦賀の氣比神宮に参拝した際に詠まれたものである。この旅は琵琶湖を北上したように、75番では「江湖帶一條」（湖、すなわち琵琶湖は一筋の帯のように湖水が光っている）、と詠んでいる。氣比神宮の社前では「拝神趨社廟 齋幣弘災祓」（神を拝せむとて 社廟に趨く 幣を齋むで 齋祓を弘ふ）と敬虔な祈りを捧げている。76番では「秋風海上宿蘆花」（秋風の海上 蘆花に宿る）と詠み、蘆の花咲く海浜の宿からの眺望を愛で、「坐久深更月影斜」（坐ること久しくして 深更に月の影ぞ斜なる）と海を照らす月の絶景を眺めている。この海は、氣比神宮の社前に広がる氣比の海岸である。ちなみに、最近まで氣比神宮の境内には道真の献木と伝える「菅公の梅」があった。

中年期の孝標女は、日記に「やがてつづきたちたる修行者<sup>すきやうじや</sup>めきたれど」と記すほどに、物詣での旅に明け暮れる時期があったが、道真の旅は、それとは比較の仕様もないわけだが、決して多いとは言えないようである。そもそもこの氣比神宮参拝は如何なる目的であったのだろうか。道真は貞観十六年（八七四）一月に兵部少輔を拝し、次いで二月には民部少輔に任じられている。さらに貞観十九年一月には式部少輔に遷っている。そこで、「朝廷から奉納使として氣比神宮に派遣せられた例が延喜式にみえる。道真も式部少輔として奉幣使として赴いたか。」<sup>（注十四）</sup>ということが参拝の目的と考えられる。なお、道真が式部少輔に任ぜられるのは貞観十九年一月であるので、氣比神宮参拝を式部少輔在任中とすることについては検討の余地がありそうである。<sup>（注十五）</sup>上記に加えて、敦賀行きには海外への興味ということが考えられそうである。周知のように、寛平六年（八九四）、遣唐使の進

止を議定されることを請うた奏状が道真によって提出され、その結果遣唐使は停止されることとなるわけだが、道真は早くから海外の情勢に強い興味を示していたのである。それは次のことから推測される。

敦賀は海外との交流の玄関であった。『延喜式』雑式には「凡越前国松原客館、令<sub>三</sub>氣比神宮司檢校」とあるが、この松原客館は渤海使迎賓のための施設で、『延喜式』の記事はその管理を氣比神宮に行わせる、というものである。客館は北陸道の松原駅に併設されていたようで、その場所は氣比神宮の前浜に広がる氣比松原の辺りと考えられている。<sup>(注十)</sup>中国東北地方の南東部から朝鮮半島北部を支配した渤海国は、神龜四年（七二七）以来盛んに日本に使節を送って来て、九二六年に滅亡するまで渤海使の来朝は三十四回を数え、文物の交流が行われた。使節団の中には漢詩文に通じた者もいて、日本の文人との交流もあった。貞觀十三年（八七二）十二月十一日、渤海使が加賀国に到着したが、翌年一月六日、少内記菅原道真が存問渤海客使に任じられている。存問渤海客使という役は、「存問使は外客入朝のさい、まず第一に任せられる役で、到着地に下って使節と応対してこれを慰勞し、ついで入京のさいには、領客使という名を兼ねて、入京路次の雑事を差配した重役である。このころの渤海使は、物資の交易とともに、文芸の交流の意味をもったから、存問使には学芸に秀でた官吏を任ずることが便利であった。」<sup>(注十七)</sup>とされる。道真はまさに適任ということになるわけだが、道真は一月十四日の母の死去により解官となっている。だが、同年五月には、特に許されて「答<sub>二</sub>渤海王<sub>一</sub>勅書」（『菅家文章』569）、「賜<sub>二</sub>渤海入覲使告身<sub>一</sub>勅書」（『菅家文章』570）を起草している。また、元慶七年（八八三）にも渤海客使が入京したが、この時は紀長谷雄らと共に鴻臚館にて接待し、贈答の詩を作っている。道真の海外に対する興味と

知識には、このような背景があったのである。敦賀は渤海人の来航するところであり、大陸の文物がもたらされる窓口である。氣比神宮の周辺には渤海使を受け入れる松原客館も存在した。以上の状況から、道真の氣比神宮参拝の目的には、渤海や大陸の情報を手に入れることがあったものと思われる。

#### 四

延喜三年（九〇三）、太宰府で薨じた道真の霊は、その後、天暦年間に京の北野にあった右近の馬場に創建された小祠で祀られていた。天徳三年（九五九）には右大臣藤原師輔が殿舎を整え、永延元年（九八七）には消失した神殿の再建があり、一条天皇が行幸されて「天満宮天神」の神号が称せられ、以後、官幣社となり、北野天満宮として現在に到っているのは周知の通りである。道真薨去後、都では災厄がうち続いた。延喜八年（九〇八）、道真左遷に関わった参議藤原菅根が卒し、翌年道真を追いやった首謀者たる左大臣藤原時平が三十九歳の若さで薨ずる。延喜二十三年（九二三）には醍醐天皇の皇太子保明親王が二十三歳で早世、延長と改元されるに至った。さらに、延長三年（九二五）、皇太子に立てられた慶頼王（母は時平女）が五歳で薨去、そして延長八年（九三〇）、祈雨を論じていた清涼殿に落雷があり、大納言藤原清貫らが死傷、同年九月の醍醐天皇の讓位、そして崩御と続く一連の不幸は、道真の怨霊に対する恐怖を決定的なものとした。こうした中で、ある人物に道真の霊から託宣が下った。『北野天神縁起』<sup>(注十八)</sup>によれば、天慶五年（九四二）七月十二日、西の京に住む「多治比の女あやこ」に対して、「われ昔世に有しとき、しばく右近馬場にあそぶ事多年。都のほとり、閑勝の地、彼にはしくはなし。」「京こへ帰

らんこといつとしらねども、ひそかにかの馬場へ向ふおりのみぞ、むねのほのほしやすらぐ事有。ほくらをかまへてたちよるたよりを得せしめよ」と告げるものであった。生前にしばしば足を運んだ京の右近衛府の馬場に「ほくら」（ほくら＝祠）を構えて霊の立ち寄る便りとして、というのである。「身の程のいやしき」を憚った「あやこ」は祠は造らずに、粗末な庵の傍らに「みづがき」を結んで五年過ぎしたが、「神慮にはかなはざりければ」、天暦元年（九四七）に「北野」の右近の馬場に遷したのであった。続いて『北野天神縁起』は天慶九年（九四六）の出来事を記している。「近江国比良の宮にして、禰宜神良種が男七歳なる童」の口を借りて道真の霊から託宣があったのである。「我物の具」である仏舍利や笏などは、ここに來た始めに納め置いてある、として、託宣は次のように続く（傍線は筆者）。

わが従者に老松・富部という二人あり。笏をば老松に持たせ、舍利をば富部にもたせたり。これらは鎮西より我ともにきたる者也。この二人ははなはだ不調のものどもぞ。心ゆるしなせそ。わがゐるたる左右にをいたれ。老松は我に随て久なりたるもの也。われむかし大臣たりしとき、夢のうちに、松身においてすなはちおれぬとみえしは、流さるべき相なり。松はわがかたちのもの也。われ瞋恚のほのほ天にみてり。もうくの雷神鬼類はみなわが従類となて、すべて十万五千也。わが所行のことは世界の災難よ。帝釈も一向にまかせ給たり。（略）

右近馬場こそ興宴の地なれ。我かのほとりにうつりなん。居たらん所には松をおほすべきなり。われこの界に有し間に、公事どもをつとめて、仏の燈分をなんとぐめたりし、その罪ふかし。自在の身となるといへども、くるしき

ことおほかるを、その所に法花三昧堂をたて、時ごとに大法のほらを吹ならす、いかにうれしからん。

これを聞いた神良種は、右近馬場に行き、朝日寺の僧最鎮らと相談している間に、託宣の通りに「一夜の中にぞ数十本の松は生出て、たちまちに数歩の林とぞなりにける」（「数十本」については、底本の建久本は「数十本の松」だが、建保本では「数千本の松」とする）という奇瑞が現出したのである。そこで、最鎮らは力を合わせて「叢祠」（草木の茂みの中の祠）を磨き上げ、「松櫓」（松に囲まれた斎垣）を整えたところ、その後は「靈驗殊勝に賞罰掲焉なり。」であったという。

『北野天神縁起』をみると、傍線部にあるように道真の生涯には松が関わっているようである。道真の従者の名前が「老松」であることを始め、生前の道真が大臣であった時に見た、「松身においてすなはちおれぬとみえし」、つまり、自分が松の木となってそれが折れてしまった、という夢は、太宰府左遷の前兆であった、としているが、そもそも「松はわがかたちのもの也」とあるように、松は道真自身の象徴であったのである。菅原道真、つまり天神様といえは先ず梅が思い浮かぶ。北野天満宮、太宰府天満宮を始め、全国の天神社の社紋（神紋）は梅紋・梅鉢紋である。天神様と梅の関係については、梅に対する道真の愛好という理解から説明するのが一般的である。しかしながら、「道真の残した多数の詩文や和歌には、梅花のほかにも、菊や竹、松や桜などにちなんだものが相当数あり、道真が梅花のみを愛好したというのはどうも事実ではなさそう」で、

「東風吹かば」の和歌を根源として、やがて梅がそれに応えて大宰府まで飛んで行ったという飛梅伝説へと発展し（鎌倉時代初頭の『新古今和歌集』一八

五三番、承久本『北野天神縁起絵巻』以下)、さらに室町時代に禅僧によって梅花愛好説がことさらに強調されていた(渡唐天神像)、これまた天神信仰の所産というべきものであった。<sup>(注十九)</sup>

というのが実相のようである。本来、天神様を象徴する樹木は、実は松であったのである。実際、北野天満宮の神紋は、梅鉢紋に加えて松紋(三階松紋)が使用されている。<sup>(注二十)</sup>さらに『北野天神縁起』では、託宣で予告された通りに、右近の馬場に「一夜の中にぞ数十本の松は生出て、たちまちに数歩の林とぞなりにける」(建保本では「数千本の松」という、いわゆる一夜千本松のことが述べられている。松はしばしば神霊の依り代とされるが、咲いても散る運命の梅ではなくて、常磐であり、長寿の象徴である松の木に道真の靈魂が宿り、その靈力を出現させた、ということであろう。松は、道真伝承において重要な役割を担っている樹木なのである。

『北野天神縁起』について、一点追加しておく、道真逝去後間もなく、その霊が都の尊意の許を訪れたことが語られている。尊意は延長四年(九二六)延暦寺の座主、天慶元年(九三八)には大僧正となった高僧で、平将門の乱に際して、天慶三年(九四〇)一月二十四日に延暦寺にて将門調伏のための修法を行ったことで知られる。延喜三年(九〇三)の道真逝去の時、尊意は三十八歳であったが、逝去後幾ばくも経たない夏の夜、比叡山で勤行する尊意の前に道真が化来し、「花洛にいりて鳳城にもちかづき、愁をものべ、怨をも報ぜんとおもふに、禅室ばかりぞ法験をほどこして、おさへ給べき。たとひ勅宣なりとも、あなかしこうけかへし給へ」と訴えた。都に入って怨みを報じたいが、尊意の法験によってそれができない。勅許であっても調伏を辞退して欲しい、と霊は訴えたのである。これに對

して、「勅宣三度」もあつたら、如何したらよいのか、と尊意が答えると、顔色を変えた霊は出された柘榴を口に含み妻戸に吐きかけると柘榴は炎となって燃え上がったが、尊意は法力でそれを消し止めた、という、『北野天神縁起絵巻』にも描かれた有名な話である。その後、尊意は「三度の宣下を蒙りて」参内して、その後は「天神をばなだめ奉り給ける」と縁起は結んでいる。「十世紀後半ごろの成立と目される『尊意贈僧正伝』(『大日本史料』尊意卒伝ほか所収)には、本段に相当するエピソードはみえず、<sup>(注二十一)</sup>典拠は未詳」とされる逸話である。この尊意は息長丹生一族の出身であった。息長丹生氏については、『姓氏録』右京皇別に、「息長真人同祖」とあり、『和名抄』にみえる上丹郷、現在の米原町丹生あたりに本拠を置いていた、息長氏の同族と考えられる<sup>(注二十二)</sup>とされている。道真伝承と関わって、ここにもまた、息長氏の影が見えている、ということが指摘できる。

## 五

貞観十八年(八七六)の秋、道真は越前国氣比神宮に参拝したのであった。『菅家文草』の詩に見たように、氣比大神に参拝し、社前に広がる氣比の海辺に照る月を賞美している。その海岸の付近には北陸道松原駅や松原客館もあった。現在、この海岸は氣比の松原と呼ばれ、三保の松原、虹の松原とともに日本三大松原とされている。氣比の松原はまた、一夜松原とも呼ばれる。この一夜松原の名の由来について、『日本歴史地名大系 福井県の地名』では『氣比宮社記』の次の説話を引用して説明している(傍線は筆者)。

聖武天皇天平二十年、異賊將襲<sub>二</sub>来于西海<sub>一</sub>、于時十一月十一日夜、敦賀地震動



而久志川浜辺数千緑松忽然出現、翠色高聳数万白鷺群集于樹上、為白旗之

翻相、又数丈巖石出現北海、為楯石城門之威粧、此時西海之賊船悉覆（注二十三）、

賊徒溺海水（注二十三）云云

聖武天皇の頃、敦賀の地に西方の海から異賊船が襲来した。すると、十一月十一日の夜、大地が振動して浜辺に数千本の松が忽然と出現したのであった。樹上には数万の白鷺が群れて、あたかも白い軍旗が翻るようであった。湾の北方には数丈の巖が出現し、楯となって守った。賊船は転覆し賊徒は悉く海に溺れた、というのである。一夜にして気比の海岸は松原と化したのである。

この一夜松原の伝承は『続日本紀』の聖武天皇天平二十年（七四八）の条には記載されず、史実としては確認できない。また、道真がこの伝承を耳にしたか否かも確認できない。推測であるが、道真が敦賀を訪れた目的に渤海使や海外情勢に対する興味があったとすれば、気比の海辺での月夜を詠んだ詩を作っていることもあり、気比の松原やそれにまつわる異賊来襲の伝承を耳にした可能性は考えられるのではないか。『北野天神縁起』に見える様々な松に関する伝承、特に北野の右近の馬場が一夜にして数千本の松原に変わったという話は、気比の一夜松原と同様の発想である。もちろん、両者とも道真自身の述作ではない。が、北野の一夜千本松の伝承には、道真と気比神宮、気比の松原との関係を知りうる者の介入があったものと考えたい。敦賀気比の地と道真との絆は、強いものがあったのである。

ここで方向を変えて、『更級日記』における松の描かれ方について確認したい。日記には、松原や松の風景を印象的に描いた場面がいくつか見ら

れる（傍線は筆者）。

1. その夜は、くろとの浜といふ所にとまる。かたつ方はひろ山なる所の、砂子はるばると白きに、松原茂りて、月いみじう明きに、風の音いみじう心ばそし。（上洛の記）

2. 浜名の橋、下りし時は黒木を渡したりし、このたびは、あとだに見えねば舟にて渡る。入江に渡りし橋なり。外の海は、いといみじくあしく浪たかくて、入江のいたづらなる州どもに、こと物もなく松原の茂れる中より、波の寄せかへるも、いろいろの玉のやうに見え、まことに松の末より波は越ゆるやうに見えて、いみじくおもしろし。（上洛の記）

3. まだ人め知らぬ山辺の松風も音して帰るものところを聞け（東山の記）

4. 南は双の岡の松風、いと耳近う心ばそく聞こえて、内には、いただきのもともで、田といふものの、引板ひきならす音など、田舎の心地して、いとをかしきに、月の明き夜などは、いとおもしろきを、ながめ明かし暮らすに、（西山の記）

5. 住吉の浦を過ぐ。空もひとつに霧りわたれる。松の梢も、海のおもても、波の寄せくる渚のほども、絵にかきても及ぶべき方なうおもしろし。（和泉往還）

1は少女時代における上総国からの上洛の記で、下総国「くろとの浜」の海岸風景に去りゆく地への感興を覚えている。白砂青松という形容通りの風景を展開させている。2も遠江国浜名の橋の風景で、松林の海岸風景に末の松山の古歌を関連づけて描写している。5は四十歳の秋に和泉国に旅した際に通った住吉の海岸風景で、松の茂った、名所絵に描いたような住吉の岸辺を描いている。これらに対して、3と4は都の東山、西山の風景

に松が点描されている。このように、作者が体験した上洛の記に二カ所、都から下る旅に一カ所、海岸の松原が描かれている。「松原」や「松」の語は六例あるが、その内の四例が、作者の実体験としての旅の途上で目にした海岸風景である。この両度の旅以外に、海岸風景に接した旅は知られていないので、海岸と松林という、まさに白砂青松のイメージが作者の脳裏にあったとも考えられる。このイメージの根源に、道真を祀る北野天満宮の創立伝承、つまり『北野天神縁起』にある一夜千本松という不思議な伝承が記憶の底で関与しているとは考えられないだろうか。さらにその背景には、氣比神宮と関わる伝承である、氣比の松原の一夜松原伝承が影を落としていると考えたい。

## 六

最後に、『更級日記』上洛の記に描かれた、武蔵国竹芝の伝承について、ふれてみたい。武蔵国「たけしほといふ寺」に伝わった武蔵の男と「みかどの御むすめ」の物語は、男と結ばれた皇女がこの地に住み着き、宣旨によって武蔵国を預け与えられ、宮の生んだ子供たちは武蔵という姓を得た、という伝承であった。『続日本紀』の称徳天皇神護景雲元年（七六七）十二月六日に武蔵国足立郡の外従五位下、丈部直不破麻呂らに武蔵宿禰の姓を賜ったこと、同八日に武蔵宿禰不破麻呂を武蔵国造に任じた記事がある。

『将門記』にも、将門が武蔵国庁の内紛に介入する段に「足立郡司判官代武蔵竹芝」の名が見えている。「武蔵氏は武蔵国造やつこにのみ兄弟多毛比命えたまひのみことの後裔で豪族。始めは丈部氏を称し、神護景雲元年（七六七）十一月に武蔵宿禰ねすくの姓を賜った」という氏族である。武蔵竹芝は武蔵国造家の子孫であった。一方、『古事記』に「天菩比命あめのほひのみことの子、建比良鳥命たけひらとりのみこと（此

は、出雲国造・無耶志国造（略）等が祖ぞ」とあるように、武蔵（無耶志）国造の祖は天菩比命である。天菩比命（『日本書紀』では天穗日命）は天照大神の子で、『日本書紀』に「天穗日命。是出雲臣・土師連等が祖なり」とあり、土師氏の先祖と伝えられるが、土師宿禰古人が天応元年（七八二）に改姓を願い出、菅原の姓を得たのであった。菅原氏の祖先神は天菩比命であり、遙かに武蔵国造家と縁が結ばれているということになるわけである。

『更級日記』作者は日記に、人から「紀伊の国に、紀の国造と申す」神のことを聞き及んだことを記している。日記の竹芝伝承の紹介においては武蔵国造に関して直接述べる所がないが、帝の宣旨にある「武蔵の国を預けとらせて」は武蔵国造を暗示しているのであろう。国造という言葉に違和感はなかったものと思われる。武蔵国造の祖神は、作者が属する菅原氏同様、天穗日命であった。武蔵国造という言葉に親近感のような感情が作者の心奥にあったとしても不思議ではない。長々と竹芝伝承を紹介しておきながら、「と語る。」と記すのみで締め括り、自身の感想やコメントを全く加えていないものの、武蔵の男と皇女の間生まれた子が、武蔵国造の姓を得て、それが菅原氏と遠い縁のある家であったことは、作者にとっては大変な感動であったはずである。そのことを知ったのは後年であっただろうが、日記執筆の時点での作者の心には、そのような感慨があったものと思われる。とすれば、ここにもまた、菅原氏という氏族への思いが封じ込められていることになる。

上洛の記に何気なく、唐突に紹介される「おきながといふ人」についても作者は、沈黙したままである。息長氏は越前国氣比神宮の信仰と関わっている一族であった。そしてまた、越前氣比の松原の伝承は、菅原道真を

祀る北野天神の縁起とも縁があるようである。『更級日記』には、表面上は菅原氏や道真について冷淡とも思える程の、ほとんど無視に近い扱いしかしていないのであるが、実は、端々に先祖道真に対するオマージュのような秘められた感情が伏流となって息づいているように考えられる。

## 注

- 一、新編日本古典文学全集『和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』（小学館、一九九四）の『更級日記』解説。
- 二、注一に同じ
- 三、『更級日記』の本文は、以下、注一の新編日本古典文学全集本による。
- 四、伊藤博「紫式部のふるさと」『源氏物語の原点』、明治書院、一九八〇
- 五、『更級日記と上総国笠森観音』（学苑 日本文学紀要）平成二十八年一月号、昭和女子大学 近代文化研究所、平成二十八年二月一日
- 六、大橋信弥『日本古代国家の成立と息長氏』（吉川弘文館、一九八四）
- 七、上田正昭『日本の歴史 第二巻 大王の世紀』（小学館、一九七三）
- 八、『日本書紀』の本文は、新編日本古典文学全集『日本書紀1』（小学館、一九九四）による。
- 九、『古事記』本文、注釈の引用は新編日本古典文学全集『古事記』（小学館、一九九七）による。
- 十、西村英之「氣比神宮」（谷川健一編『日本の神々―神社と聖地 第八巻 北陸』、白水社、二〇〇〇）
- 十一、注九 頭注
- 十二、注十に同じ
- 十三、日本古典文学大系『菅家文章 菅家後集』（岩波書店、一九六六） 付載の年表によった。菅原道真の詩文の引用も同書による。

## 十四、注十三 頭注

十五、道真の氣比神宮参拝の時期については、「秋、越前国氣比神宮に参詣」（注十三文献）、「秋、越前の氣比神社に奉幣使として詣る」（所功『菅原道真の実像』臨川書店、二〇〇二）、など、貞観十八年秋とするものが多い。また、坂本太郎『菅原道真』（吉川弘文館、一九九〇）は、「この期間」すなわち「民部少輔時代に越前の氣比神宮あたりに詣でたものではあるまいか」とする。道真の民部少輔拝命は貞観十六年二月二十九日、貞観十九年一月十五日には式部少輔に転じている。

- 十六、『日本歴史地名大系18 福井県の地名』（平凡社、一九八一）
- 十七、注十五 坂本太郎文献に同じ
- 十八、日本思想大系『神社縁起』（岩波書店、一九七五）による。
- 十九、竹居明男編『北野天神縁起を読む』（吉川弘文館、二〇〇八）
- 二十、丹羽基二『神紋総覧』（講談社学術文庫、二〇一六）
- 二十一、注十九に同じ
- 二十二、注六に同じ
- 二十三、注十六に同じ
- 二十四、新編日本古典文学全集『将門記』（小学館、一九九四） 頭注

（もとよし すすむ ビジネスデザイン学科）